

第一章 修業時代

ピエール・フィリップ・ジャンダン

あなたはパステイ・シュやパロディが好きですよ。そこでまずは、ハイデガーがアリストテレスの人生について述べた言葉に目配せをしながらこの対話をはじめたいと思います。「ジャン・リュック・ナンシーは生まれ、働いた。彼はいまもお働いている」。

こう言えるほど、あなたは世界に対して——ほとんど失われてしまった私たちの世界とこれから到来する世界に対して——鋭敏な注意を向けています。とはいえ、あなたのこれまでの足取りを理解する際には、それも今日のように「思想家」と「哲学者」を同義語とみなさないならば、次のようなアカデミックな問いが頭をもたげます。いかにしてあなたは哲学者になったのでしょうか。二〇〇二年のポンピドゥー・センターでの講演タイトルは「私は哲学者になったことはない」というものでしたが、なったことはないとはどういうことなのでしょう。

ジャン・リュック・ナンシー　その講演のタイトルにはいくぶん挑発的で傲慢なところがありますが、ポンピドゥー・センターがこの問いを投げてきたときに、突然ひらめいたのです。私はずっと哲学者だったのだから、哲学者になったのではない、と。私が知ったこと、あるいは私が経験したことのすべてにはひとつの背景がありました。私はその背景を哲学とは呼んでいなかったのですが、この背景は哲学の領域に属していたのです。つまり、思考に関する事柄、概念把握に対する関心を背景にしていました。

ジャンダン　あなたが語っているのは、世界に対して奇妙な感覚を経験していたということでもあるように思えます。たとえば、子どもの頃に夜の車のなかで、ヘッドライトに照らされた木々は見えなくなったらどこに行ってしまうのか、と問うように。

ナンシー　たしかに多くの子どもがそのような疑問をもつでしょう。鮮明に思い出すのは、バーデン＝バーデンに住んでもない頃、家に帰るために坂道を上り、鉄製の柵に沿って歩いていたときのことです。いくつもの庭の前に張り巡らされていたはずのこの柵には、少しばかり凝った模様が施されていたのですが、私はそうした装飾のすべてが必然的なかどうかを考え込んでいました。そのように柵を作ることは必然なのか、もしいまあるものをすべて取り除いたとして、そうして回収した金属から何を作ることができるのか。そのような問いを考えていました——いわばアラバスク模様が作り出す光景に魅了されていたのですね。おそらく、世界から少し切り離されることで見つかる何かが、私たちひとりひとりにはあるのだと思います。世界から切り離されるとはいえ、それはまったく痛ま

しいことでも不幸なことでもありませんし、世界から撤退することでもありません。幼い頃から私は田舎道をひとりで散歩することに大きな喜びを感じており、高校^{リセ}の学生のように犬を引き取ってからは、その子が私の仲間になりました。もちろん友人もたくさんいて連絡を取り合っていました、いつでも自然のなかをひとりで散策することが好きでしたし、たとえば近所の農家のひととタバコやブドウやトウモロコシを収穫したりするような手仕事に没頭することが好きでした。手仕事には世界のほかの部分から撤退するという性質がありますが、私はつねにそのような手仕事を好ましく思っていたのです。物質的な作業に没頭していると、「どのようにしようか? どこを通ろうか? 木のどこに斧を入れようか?」のようにブドウを籠に入れようか?」といったことしか考えなくなりました。私はこのことを強く感じていましたが、その一方でつねに読書にも非常に心を奪われていました。私にとって、手仕事と読書が与える感覚は結びついていたのです。読書をしているときにもある種の孤独と撤退がありますし、それは別の世界に入ることでもあります。たとえば、高校^{リセ}に通っていたときであれば、それはバルザックやゾラの世界でした。

少なくとも、思考それ自体に対して思考が働くというかたちで、そこには哲学がありました。それは、何か特定の対象に対して向けられた思考ではありません。たしかに、社会的な活動という面では、たとえば統一コレージュ^{ユニバーシティ}や教育の民主化のような対象に対して思考を向けていましたし、聖書に関する対象についても思考していました。しかし、それにもかかわらず、おそらく対象はなかったのです。非常に百科事典が好きで、城塞の挿絵の入った二巻本の『ラールス百科事典』などをよく読んでい

ましたが、それは学ぶことが楽しかったからではありません。私はけっして物知りにはなりませんでした。私は、《machicoulis》〔城の石落し〕や《échauguette》〔城の物見台〕といった言葉を見ると快樂を覚えていたのです。言語への関心があつたわけですが、そのような関心は、対象なき思考、空転する思考と私が呼ぶことになるものと切り離せないものでした。

ジャンダン　世界に対する関係の初期の形態についてお話しくださいましたが、次にお聞きしたいのは、あなたが世界にやつて来たときに世界がどのようなものであつたか、その世界においてどのような道を多少なりとも選択して切り開いてきたかということです。

ナンシー　私がやつて来た世界とは、第二次世界大戦の世界でした。あたかも戦争がはじまつたのと時を同じくするかのように、母は一九三九年の終わりに私を身ごもり、翌一九四〇年の七月に私は生まれました。とはいえ、生まれた日付というのは一般にたいして重要ではありません。生まれた者は、生まれた世界についての意識をまったくもっていないですからね。いづれにしても、私は戦争のまつただ中、ボルドーの占領地帯で生まれ、両親は大混乱のなか移住を余儀なくされ、私は一九四五年のフランスの解放まで移住先で育ちました。つまり、私の幼年期の世界は少し特殊で、占領されたフランスの世界なのですが、私はそれをいささかも意識していませんでした。かろうじて覚えているのは、Kommandantur 【ドイツ語で
軍司令部】 についての話を聞いたことと、もちろんこれは戦後になつて知ったことです。両親の友人のひとりがレジスタンス運動をしていたことくらいです。両親はレジスタンス運動には参加しておらず、私は世界の出来事とは無縁の平凡な環境のなかをさまよっていました。

それは、開戦前後に生まれた多くの子どもが経験した環境だったと思います。終戦時の解放記念のパレードはよく覚えています、それも気晴らしのひとつにすぎませんでした。最初の選挙と配布された投票用紙についても覚えています。ほかには……、そうですね、すぐにアメリカとの最初の出会いがありました。ウォルト・ディズニーのアニメーション映画『ダンボ』をボルドーで祖父と観ました。アメリカ人の段取りのよさにはとても驚かされました。チョコレートとチューイングガムだけでなく、映画などさまざまなものがすぐにやって来たのです！

その後、父がドイツに駐留するフランス占領軍に配属されました。父は軍の技師で、学校でドイツ語を学んだことがあったからです。父の父、つまり父方の祖父は、とても控えめなひとでほとんどしゃべらないひとでしたが、第一次世界大戦の際に従軍した経験があり、もう二度と戦争が起きないようにと息子にドイツ語を学ばせたのでした。そういうわけで、私たち家族はドイツへ向かいました。一九四二年に妹が生まれていたのですが、その後さらに弟と二人の妹が生まれます。バーデン＝バーデンには、五年か六年ほどいました。ですので、私の正真正銘の子ども時代場所はバーデン＝バーデンなのです。そこでの年月とは、占領された国で過ごした年月であり、何も売り物のない商店のシヨーウインドウが妙に記憶に残っていますが、驚いたことにそれ以外にはたいして何も思い出せないのです。当時は誰も戦争について話してくれませんでした。少なくとも記憶にはありません。ひとつだけ明確に覚えているのは、バーデン＝バーデンにあった城館の中庭に大量の雑誌や本がうずたかく積み上げられていたのですが、ある日それを漁っていたときに、ヒトラーがドイツ中を回り、子ども

や女性、高齢者と触れ合う様子を報じる雑誌の特集号を見つけたことです。ほかに、ナチス政権下の小学校で使われていた読本も拾いました。ドイツ文字（Falken）で印刷されたこの読本には、ヒトラー・ユーゲントの制服を着てハーケンクロイツの腕章をした少年少女たちが、五月柱メイポールの周りで踊ったりする写真がたくさん載っていたことを覚えています。なぜこれらの本を手にとったのか不思議でありません。おそらく偶然ではないと思うのですが、当時何を意識していたかはまったくわかりません。さっぱりわからないのです。

フランスには一九五一年に戻りました。バーデン＝バーデンにあるシャルル・ド・ゴールの名を冠した学校、そこではフランス語で教育がおこなわれていたのですが、その学校で私は第六学年「中等教育」〔中等教育二年目〕を迎えており、その学年の途中で、フランス南西部のベルジュラックに戻りました。あいかわらず戦争についてはほとんど意識しておらず、リーダー・ホーゼンをまだ着ていました。破れまじし、ほとんど汚れもせず、非常に実用的な服でしたからね。ベルジュラックのあるドルドーニュ県では、戦時中マキやレジスタンスの運動家がドイツ人に処刑されており、そのため同級生のなかには私がリーダー・ホーゼンを着ていることをよく思わないひといましたし、私がドイツ語を話せること——おそらく話せると自慢したのだと思います——が喧嘩の原因にもなりました。私の両親のような政治的な意識をもたない人々が、あの当時起こっていた途方もない現実から子どもを完全に切り離してしまえたのはとても奇妙なことです。いずれにしても、私はそのような無意識のなかで育ったのですが、徐々にいろいろなことが起こっていき、とりわけあるひとつの出来事が、ユダヤ人が現実